『酔翁談録』研究
（要旨）

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期人文学専攻
学生番号:D153942
氏　　名:孟夏

本論文は、『酔翁談録』という書物について考察を加えたものである。全体は、序章、第一部（第一章、第二章）、第二部（第三章、第四章、第五章）、第三部（第六章、第七章）、終章の五つの部分に大きく分かれる。

序章では、まず『酔翁談録』という書物の概要、関連する先行研究、論文の構成および研究の目的について述べた。現存する『酔翁談録』の正式な書名は『新編酔翁談録』（以下『酔翁談録』とする）で、この書物は宋末元初の頃に、廬陵（現在の江西省吉安市）の羅燁という人物によって編集されたとされる文言小説集である。この書は中国では早くに散佚しており、現在目にしうる版本は日本の観瀾閣旧蔵本のみであり、天理大学附属天理図書館に収蔵されている。『酔翁談録』に関する先行研究では、書物の成立や性質などについて考察がなされてきたものの、その関心は『酔翁談録』と語り物との関連性についての問題に集中しており、『酔翁談録』について全面的、具体的な分析が行われたわけではない。つまり、『酔翁談録』という書物そのものについてはほとんど明らかになっておらず、書名に反映された情報、編者の生活環境、編者がこの本を編纂するときに使用した書物などの問題について、大いに検討の余地を残している。『酔翁談録』に収録された作品の中には、他の書物には見られない、つまり『酔翁談録』にしか保存されていないものも一部存在する。宋代は小説などの俗文学が大きな発展を遂げた時期でもあり、『酔翁談録』は中国小説史の展開を考える上で、重要な文献といえる。そのため、筆者は主に『酔翁談録』の成立背景、成立過程、後世の受容の三つの方面に注目し、『酔翁談録』に対して系統立てて検討した。

第一部では、『酔翁談録』の成立背景について考察を加えた。

第一章では、書名の中の「談録」という言葉に着目し、同様に「談録」と名付けられた書物群の特徴を考察した。「談録」と名付けられた書物について、唐代から清代に至るまでの「談録」作品のうち、北宋から南宋の時代にかけて編纂されたものが約半数を占めるということがわかった。つまり編者羅燁は「談録」を編纂するという文化的背景の影響を受け、『酔翁談録』はこうした流れの中で誕生した書物だと考えられる。それらの「談録」に共通する特徴を考察してみると、「談録」と名付けられた書物は、いずれも複数の人々が宴席の場などにおいて談論した瑣事、逸事などを記録したものであり、一定の学識を備えた文人によって編纂され、中でも『人名＋談録』という形の書物は、書名に冠された人物の言論を記録した作品であることがわかった。従って「談録」の部類に属する『酔翁談録』は、他の「談録」作品と同様に、宴席の場などで語られた瑣事や逸事に、「酔翁」という人物のコメントが加わった、あるいは「酔翁」という人物が語った瑣事や逸事が、文人羅燁によって記録されたものであることが指摘できる。

第二章では、書名の中の「酔翁」という言葉に着目し、特に編者羅燁の故郷廬陵の文化背景を考察する。周知のように、宋の欧陽修は「酔翁亭記」を作り、自ら「酔翁」と号した。また、「酔翁亭記」（『文忠集』巻三九）に「廬陵欧陽修也（廬陵の欧陽修である）」とあることから、欧陽修は自分が廬陵の人間であることを前面に押し出していたことがわかる。以降、「酔翁亭記」は後世の文人たち、特に廬陵地方の文人たちに大きな影響を与え、廬陵の

誇りと見なされたのである。羅燁は廬陵の同郷人として、これらの影響を受け、地方文人の語りを記録して、欧陽修の号を書名に冠した可能性が高いと考えられる。一方、「酔翁」と名付けられた書物を調査していくと、これらの書物はいずれも笑話や女性に関する詞を集めたもので、宴席で語られた話を収録したものである。つまり「酔翁」は、廬陵、あるいは廬陵の人をイメージさせると同時に、酒席での語らいをイメージさせる言葉でもあったのだろう。『酔翁談録』の内容を見ると、そのほとんどが女性に関する話であり、笑話なども見られることがわかる。以上のことから、編者羅燁が『酔翁談録』を編纂してこのように命名したのは、彼の故郷である廬陵地方で文人たちの談話および「談録」の編纂が盛んであったこと、廬陵の誇りである「酔翁」すなわち欧陽修の影響を強く受けていたこと、さらに「酔翁」に笑話や女性に関するイメージが備わっていたことが強く影響していると考えられる。

第二部では、『酔翁談録』の成立過程について考察を加えた。

第三章では、所収の話と前代あるいは同時代の他のテキストを比較し、文字が一致している同話に注目した。その結果、羅燁は、一つの話に対して一つの書物だけを参考にしてそのまま引用したのではなく、複数の書物に基づきながら文字を補い、加筆を控えつつも、より完成度の高い話を復元しようとしていたという結論が得られた。

しかし編者自身が加筆した箇所も、少ないとはいえ確認できる。したがって第四章では、『酔翁談録』にしか見られない描写に注目した。その結果、編者羅燁によって加えられた部分には、編者の編纂の偏りが反映されていることがわかる。それらの部分に共通する特徴は、「（一）他の書物よりも白話的な表現となっていること」、「（二）登場人物に関する情報がより具体的であること」、「（三）話の結末に違いが見られ、記述がより詳しく、表現が豊かになっていること」、「（四）情愛に関する描写が見られること」という四点である。この内、（四）は『酔翁談録』の主題（女性に関する話を収録する）と重なるが、それ以外の（一）（二）（三）は語り物などの通俗的な作品の描写特徴と類似するという結論を導いた。

第五章では、上述の四章の考察を踏まえ、編者の編纂の意図を検討した。第一部で考察した通り、『酔翁談録』は文人である羅燁が「談録」の性質を持つ書物を編纂したものである。しかし『酔翁談録』を編纂する場合、羅燁は話の完成度を追求し、また白話的な表現などの描写を加えるという工夫をした。それらの作業は、人物の談論を記録する「談録」の編纂方法とは異なっているため、宋代の文献を調査すると、人々の談論の内容を記録する際、話の完成度を追求し、語り物などの作品に見られる白話的な表現などと類似する描写を加えるという作業は、実は『酔翁談録』だけではなく、他の書物の中にも見られることが分かった。そこで本論文では、北宋の趙令畤によって書かれた「元微之崔鶯鶯商調蝶恋花詞」（『侯鯖録』巻五）と南宋の洪邁の『夷堅志』を挙げた。両者の編纂の意図を検討した結果、いずれも人々にじっくり味わって読んでもらいたいという意図が読み取れた。さらに『夷堅志』の編者洪邁は読者層の広がりを意識し、そのより広い読者層に訴えたいという意図を持っていたと考えられる。以上の考察によって、羅燁がこのように、他の「談録」作品とは違う編纂方法で『酔翁談録』を編纂したのは、語られた話を記録するという「談録」の形を用いつつも、

それが広く「読まれる」ことを意識していたためであることが指摘できる。

第三部では、『酔翁談録』の受容について考察を加えた。

第六章では、まず現存する『新編酔翁談録』（この章では現存する『新編酔翁談録』の版式などを検討するため、略称ではなく正式な書名を用いる）に見られる避諱字や俗字などを考察することによって、この本が元代に出版されたものであることを確認した。次に版式に着目すると、その版式は元代に出版された複数の書物の版式と類似することがわかる。つまり、現存する『新編酔翁談録』は後世のある出版側の人物によって改めて版式が整えられて出版されたものであると考えられる。出版者がこのような工夫をして『酔翁談録』を出版した意図を探るために、『新編酔翁談録』の版式と類似する書物を調査したところ、この書の性格は、元代で出版された『新刊分類江湖紀聞』や『新編湖海新聞夷堅続志』など、内容を分類して読者に書物の内容をより容易に閲読させ、人気を集めようとした読み物と類似することが分かった。つまり、『新編酔翁談録』は上述する『新刊分類江湖紀聞』や『新編湖海新聞夷堅続志』と同じように、後世の人々によって再編纂され、版式にも工夫が凝らされ、羅燁の「広く読まれる」という意図をさらに強め、加えて利益も追求しようとするものだったと結論付けた。

第七章では、『酔翁談録』の後世における流通状況を検討した。『酔翁談録』に関する記載や、明代の書物の文字との一致状況などを調査することによって、この書が出版された後、一時的に流通し、講釈師などの人物に読まれ、語り物などのような俗文学に影響を与えたようであるが、明代に至っては、それほど広く流通した形跡はなく、他の書物に押されて次第に表舞台から姿を消したようである。

終章では、中国小説史における『酔翁談録』の位置づけを明らかにした。文人の談論が盛行していたという背景の下に生まれた『酔翁談録』は、編者の編纂意図や、出版者の工夫などの要因の影響で、世に流通し、後世の文学、特に語り物に関する作品の素材として使われ、直接、あるいは間接的な影響を与えたと考えられ、文人文学と民間文学の架け橋の役を果たした書物の一つといえる。こうした書物は、後世に散佚し、あまり見られないという状況になったが、文学の発展に影響を与えたのは確かである。したがって、このような書物を様々な視点から多角的に研究することによって、当時の文学の発展状況がより明確かつ全面的に見えてくると考えられる。